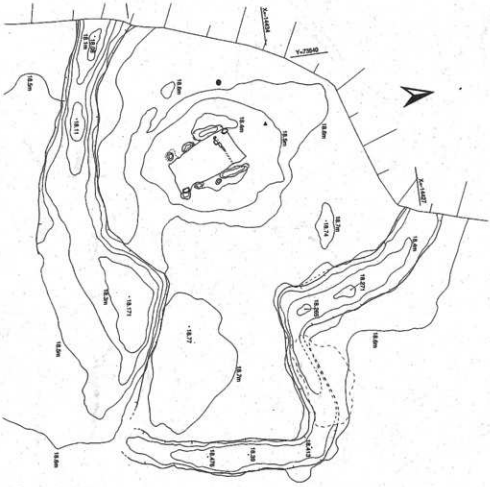
雲仙市文化財調査報告書(概報)　第１集

龍王遺跡(倉地川古墳)

―国見中部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報―



２００６

長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

このたび平成16年度に実施しました雲仙市国見中部地区圃場整備事業に伴う龍王遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

龍王遺跡は雲仙市の北部に位置し，東側には土黒川，西側には倉地川が流れるなだらかな扇状地の水田地帯に所在します。古代条里制の痕跡が残る田園風景の中に遺跡が広がっており，当地より南側を望めば雲仙普賢岳がそびえ，頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。また，北側に目を移せば，眼下には有明海が広がり，佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

龍王遺跡からは，旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が数多く発見されております。今回報告いたしますのは，調査において新規に発見された前方後円墳であります。当初遺跡内には古墳の所在はまったく想定しておりませんでした。龍王遺跡はその大部分が水田として利用されており，古墳と思しき痕跡はほとんどありません。発見された古墳は水田地帯の中に浮島のように残された「畑地」にありました。詳しく調べてみると，「その畑からは開墾時に巨大な岩が出て，庭石に運んでいった。」とのことでありました。おそらく調査では検出されなかった「石室」の一部でしょう。墳丘や石室はすでに消滅してしまっておりましたが，石室の床面，古墳周りの溝などははっきりと確認でき，空中写真などからもはっきりと鍵穴状の「前方後円墳」であると確認できます。石室内部からは鉄製品や勾玉などの副葬品が，古墳の周囲からは大量の須恵器が，また，少量ですが人骨も発見されています。発見された須恵器から古墳の年代を推測すると，島原半島では「最後に造られた前方後円墳」と考えられ，古墳時代の島原半島の歴史解明に大きな進展をもたらすものです。

「雲仙市」は平成17年１０月１１日（とおかいいひ），島原半島の北西部７町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）による合併で誕生しました。雲仙岳を主峰とする山々と緑豊かな農業地帯，また，豊饒の海である有明海・橘湾とともに新たな歴史を築いていきます。今報告が雲仙市として最初のものであり，旧町時代と同じくこれまでどおり祖先の貴重な文化遺産を保護し，これを後世に伝えることは，私たちに課せられた重要な責務であります。合併により大きく拡大した雲仙市のなかで，各地域の歴史の重要性・必要性はますます高まるものと考えられます。今後も貴重な文化財を保護し，地域の発展に寄与するべく事業に取り組んでいきたいと考えております。

最後になりましたが，今回の調査に当たり，地権者の皆様，工事関係者の皆様，大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成18年３月31日

長崎県雲仙市教育委員会
教育長　鈴山勝利

例　　言

1．本報告は2004年（平成16年度）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する龍王遺跡の緊急発掘調査の報告(概報)である。

2．調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。
調査は2004年３月～４月に範囲確認調査を実施し，その結果をもとに下記の期間で発掘調査を実施した。
2004年８月４日～2005年３月21日（平成16年度）　１区～31区
2004年８月30日～2004年10月31日（平成16年度）　倉地川地区

3．調査当時の体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教育長	原　宮之
	同	教育次長	吉田　正昭
	同	教育社会係長	柴崎　孝光
調査担当	同	社会教育係	辻田　直人
	同	文化財調査員	竹中　哲朗

4．現地での遺構・遺物の実測は東文子・林繁美・寺中典子・深水聡子・福田次郎・竹田将人・竹中・辻田が行い，遺物の復元，実測，製図は竹中・織田健吾・早稲田一美・柳原亜矢子が行った。写真は現地写真は竹中・辻田が行い，遺物写真は竹中・織田が行った。

5．遺構実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．空中写真撮影業務は㈱九州文化財研究所に委託した。

7．本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

8．本書で用いた方位はすべて真北であり，国土座標は世界測地系による。

9．現地調査および本書の発刊にあたって多くの方々からご助言ご協力いただき，記して謝意を表します。
小田富士雄（福岡大学）・宮崎貴夫・川道寛・古門雅高・本田秀樹・柚木亜貴子（長崎県学芸文化課），渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム），荒木伸也（長崎県南島原市教育委員会），宇土靖之（長崎県島原市教育委員会），長崎県島原振興局，長崎県教育委員会，国見町郷土史研究会，織田建設（順不同）

10．本書の執筆は竹中哲朗・織田健吾が分担し，各章及び各節文末に執筆者を記した。

11．本書の編集は竹中による。

目　　次

巻頭図版
目次
本文
図版

第１章　龍王遺跡周辺の地理的・歴史的環境……１ｐ
第１節　龍王遺跡の地理的環境（織田）　第２節　龍王遺跡周辺の歴史的環境（織田）

第２章　調査にいたる経緯……５ｐ
第１節　前方後円墳発見の経緯（竹中）　第２節　記者発表・現地説明会（竹中）

第３章　調査の概要……７ｐ
第１節　試掘調査の成果（竹中）　第２節　表面採集資料の紹介（織田）
第３節　検出された遺構の概略（竹中）

第４章　方形周溝墓と前方後円墳……15ｐ
第１節　調査区の設定と目的（竹中）　第２節　方形周溝墓（竹中）
第３節　前方後円墳（竹中・織田）

第５章　土坑・掘立柱建物……52ｐ
第１節　土坑墓と集石遺構（竹中）　第２節　掘立柱建物（竹中）

第６章　考　　察……57ｐ
第１節　倉地川古墳の概要（竹中）
第２節　雲仙市国見町内出土同心円文当て具痕（竹中）
第３節　龍王遺跡31区住居跡出土土師器の紹介（竹中）
第４節　龍王遺跡発見の古墳時代前期豪族居館（竹中）
第５節　龍王遺跡22区住居跡出土土師器の紹介（竹中）

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図(1/10,000)
第２図　龍王遺跡周辺遺跡図(1/2,000) ……３
第３図　調査区配置図(1/2,000) ……４
第４図　龍王遺跡全体図(1/4,000) ……７
第５図　真正寺条里跡第143号試掘坑
出土石器(1/1) ……８
第６図　第101号試掘坑出土土器(1/3)……８
第７図　表面採集資料①(1/3) ……８
第８図　表面採集資料②(1/3) ……９
第９図　表面採集資料③(1/3) ……10
第10図　表面採集資料④(1/3) ……11
第11図　表面採集資料⑤(1/3) ……12
第12図　倉地川地区検出遺構平面図(1/200)
……14
第13図　方形周溝墓の調査区(1/200) ……15
第14図　前方後円墳の調査区(1/200) ……15
第15図　方形周溝墓実測図(1/80・1/40) ……16
第16図　方形周溝墓出土土器(1/3) ……18
第17図　倉地川古墳測量図(1/100) ……21～22
第18図　埋葬施設平面図(1/30)……23
第19図　石室石障転用凹石(1/4) ……23
第20図　副葬品（装身具類2/3)……24
第21図　副葬品（鉄製品1/2)……24
第22図　南側くびれ部検出状況(1/50)
……25～26
第23図　南側くびれ部出土土器接合関係・
土師器(1/50)……27～28
第24図　南側くびれ部出土土器接合関係・
須恵器(1/50)……29～30
第25図　南側くびれ部出土土器接合関係・
須恵器甕(1/50)……31～32
第26図　北側くびれ部検出状況(1/50)……33
第27図　周隍セクション図・土器片分布図
(1/30)……35
第28図　前方後円墳出土土師器(坏・皿・1/3) 36
第29図　前方後円墳出土土師器(高坏・壺・1/3)
……37
第30図　前方後円墳出土須恵器(坏・1/3)……40
第31図　前方後円墳出土須恵器(高坏・1/3)…40
第32図　前方後円墳出土須恵器(甕・1/3)……42
第33図　前方後円墳出土須恵器(提瓶・壺・1/3)
……42
第34図　前方後円墳出土須恵器
(小壺・平瓶・1/3) ……43
第35図　前方後円墳出土須恵器(甕①・1/3)…44
第36図　前方後円墳出土須恵器(甕②・1/4)…45
第37図　前方後円墳出土須恵器(甕④・1/3)…46
第38図　前方後円墳出土須恵器(甕③・1/4)
……47～48
第39図　前方後円墳出土須恵器(甕⑤・1/3)…49
第40図　前方後円墳出土須恵器(甕⑥・1/3)…50
第41図　前方後円墳出土須恵器(甕⑦・1/3)…50
第42図　前方後円墳出土須恵器(甕⑧・1/3)…51
第43図　倉地川地区土坑墓出土土器(1/3) …52
第44図　倉地川地区土坑墓 SK01(1/20) ……52
第45図　倉地川地区集石遺構 SK02平面・
セクション図(1/20)……53
第46図　倉地川地区 SB01平面・
エレベーション図(1/50)……54
第47図　倉地川地区 SB01柱Ｅ４出土土器(1/3)
……54
第48図　倉地川地区 SB02平面・
エレベーション図(1/50)……55
第49図　倉地川地区 SB03平面・
エレベーション図(1/50)……56
第50図　倉地川地区 SB03柱Ｎ出土土器(1/3)
……56
第51図　埋葬施設(玄室)規模……57
第52図　国見町内出土同心円文当て具痕
(石原・矢房遺跡1/1)……58
第53図　国見町内出土同心円文当て具痕
(十園遺跡1/1) ……59

第54図　国見町内出土同心円文当て具痕
（倉地川地区①1/1）……60
第55図　国見町内出土同心円文当て具痕
（倉地川地区②1/1）……61
第56図　31区 SB01出土土師器(1/3)……62
第57図　龍王遺跡発見の囲郭施設と関連する建物群(1/400)……64
第58図　囲郭施設内部 SB 4 出土土師器(1/3)……65
第59図　龍王遺跡22区 SB 5 住居跡出土土器(1/3)……67

表　目　次

第 1 表　龍王遺跡周辺遺跡名……3
第 2 表　表面採集資料①②観察表……9
第 3 表　表面採集資料③観察表……10
第 4 表　表面採集資料④観察表……11
第 5 表　検出遺構一覧表……14
第 6 表　方形周溝墓出土土器観察表……17
第 7 表　周隍地区別土器分布表……34
第 8 表　前方後円墳出土土師器(坏・皿)観察表……36
第 9 表　前方後円墳出土土師器(高坏・壺)観察表……38
第10表　前方後円墳出土須恵器(坏)観察表…39
第11表　前方後円墳出土須恵器(高坏)観察表……40
第12表　前方後円墳出土須恵器(甕・提瓶・壺)観察表……41
第13表　前方後円墳出土須恵器(小壺・平瓶)観察表……43
第14表　前方後円墳出土須恵器(甕)観察表…46
第15表　国見町内出土同心円文当て具痕……58
第16表　31区 SB01出土土器観察表 ……63
第17表　龍王遺跡22区 SB 5 出土土器観察表……68

図 版 目 次

巻頭図版① 龍王遺跡倉地川地区上空より雲仙普賢岳を望む（2004年10月）
巻頭図版② 前方後円墳上空写真（龍王遺跡倉地川地区）
横穴式石室検出状況（写真右は東，上は開口部側）
巻頭図版③ 埋葬施設床面の鉄製品出土状況（写真下が西）
周隍での土器の集中（後円部南側）
巻頭図版④ 方形周溝墓検出状況（龍王遺跡倉地川地区）
方形囲郭施設の土器検出状況・断面・上空写真

図版1 遺跡上空写真
図版2 倉地川地区検出状況(上が西)
前方後円墳上空写真(上が西)
南側周隍遺物検出状況(上が西)
方形周溝墓上空写真(上が西)
方形周溝墓検出状況(南より)
方形周溝墓周溝断面(西より)
図版3 方形周溝墓及び掘立柱建物出土土器
埋葬施設出土の石障片接合品
(凹石・19図 P23)
南側周隍出土状況(南より)
南側周隍出土状況(東より)
南側周隍断面(西より)
埋葬施設検出状況(上が東)
周隍と埋葬施設の位置関係(南より)
南側くびれ部土器出土状況(西より)
図版4 北側くびれ部土器出土状況(東より)
前方後円墳検出作業(南より)
古墳見学会の様子①
古墳見学会の様子②
土坑墓検出状況(北より)
土坑墓半裁状況(北より)
土坑墓断面(西より)
土坑墓出土土器(43図 P52)
図版5 表面採集資料(弥生土器片・土師器片)
表面採集資料(須恵器片・9図 P10)
表面採集資料(須恵器甕片・10図 P11)
表面採集資料(陶磁器片・11図 P12)
周隍出土土師器坏類
周隍出土土師器坏(28図-4 P36)
周隍出土土師器高坏(29図-9 P37)
周隍出土土師器高坏(29図-10 P37)
周隍出土土師器高坏(29図-11 P37)
図版6 周隍出土土師器高坏(29図-12 P37)
周隍出土土師器高坏(29図-18 P37)
周隍出土土師器脚付壺(29図-22 P37)
周隍出土土師器高坏
(29図-13・14 P37)
周隍出土土師器高坏
(29図-16・17・19 P37)
周隍出土土師器壺(29図-20・21 P37)
周隍出土土師器高坏(29図-18 P37)脚内部
周隍出土須恵器坏(30図-1 P40)
周隍出土須恵器(30図-2 P40)
周隍出土須恵器坏類(30図 P40)
図版7 周隍出土須恵器坏類(30図・31図 P40)
周隍出土須恵器高坏(31図-1 P40)
周隍出土須恵器高坏(31図-2 P40)
周隍出土須恵器高坏脚部片・蓋
(31図-4・7，32図-4 P40・42)
周隍出土須恵器蓋(32図-1 P42)
周隍出土須恵器蓋(32図-2 P42)
周隍出土須恵器蓋(32図-3 P42)
周隍出土須恵器蓋(32図-5 P42)
周隍出土須恵器蓋(32図-6 P42)
周隍出土須恵器長頸壺(33図-2 P42)
図版8 周隍出土須恵器小壺(34図-1 P43)

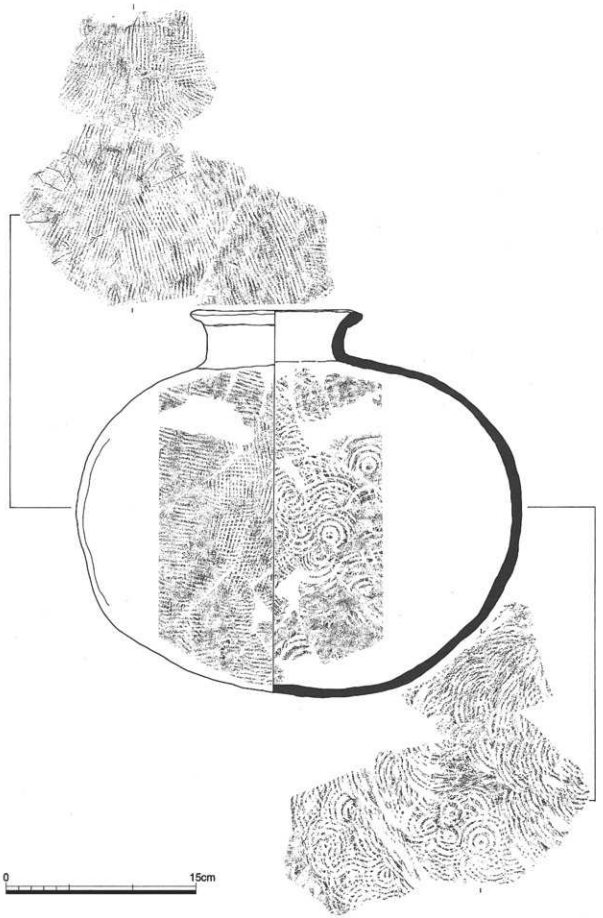
周隍出土須恵器提瓶(33図-1 P42)
周隍出土須恵器平瓶(34図-2 P43)
周隍出土須恵器平瓶(34図-3 P43)
周隍出土須恵器俵型瓰
(32図-7 P42)
周隍出土須恵器俵型瓰の内部①
(32図-7 P42)
周隍出土須恵器俵型瓰の内部②
(32図-7 P42)
周隍出土須恵器俵型瓰の上面観
(32図-7 P42)

図版9 周隍出土須恵器甕(35図① P44)
周隍出土須恵器甕
(39図⑤ P49, 35図① P44)
周隍出土須恵器甕(36図② P45)表面
周隍出土須恵器甕(36図② P45)内面
周隍出土須恵器甕
(38図③ P47～48)上半
周隍出土須恵器甕
(38図③ P47～48)下半

図版10 周隍出土須恵器甕(37図④ P46)外面
周隍出土須恵器甕(37図④ P46)内面
周隍出土須恵器甕(39図⑤ P49)表面
周隍出土須恵器甕(39図⑤ P49)側面
周隍出土須恵器甕(40図⑥ P50)外面
周隍出土須恵器甕(40図⑥ P50)内面
周隍出土須恵器甕(42図⑧ P51)
周隍出土須恵器甕(42図⑧ P51)外面
底部
周隍出土須恵器甕(42図⑧ P51)内面
底部

図版11 周隍出土須恵器甕(41図⑦ P50)表面
周隍出土須恵器甕(41図⑦ P50)表面
周隍出土須恵器甕(41図⑦ P50)内面
31区住居跡出土土師器壺
(56図-1 P62)
31区住居跡出土土師器(56図 P62)

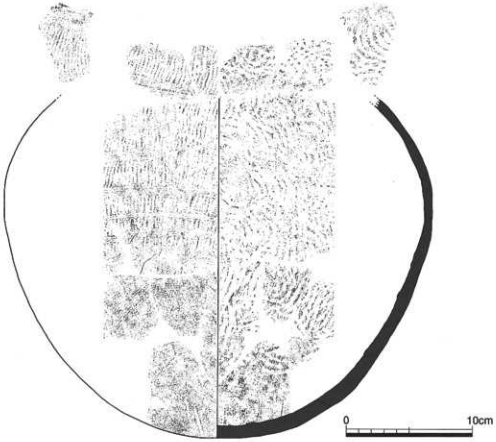
第1図　遺跡位置図(1/10,000)

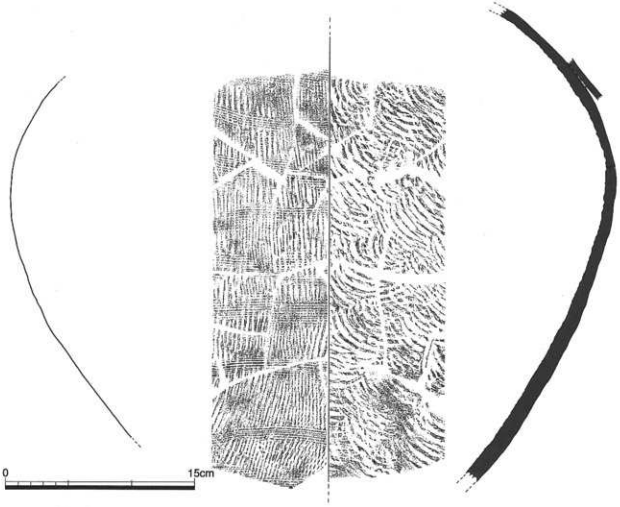


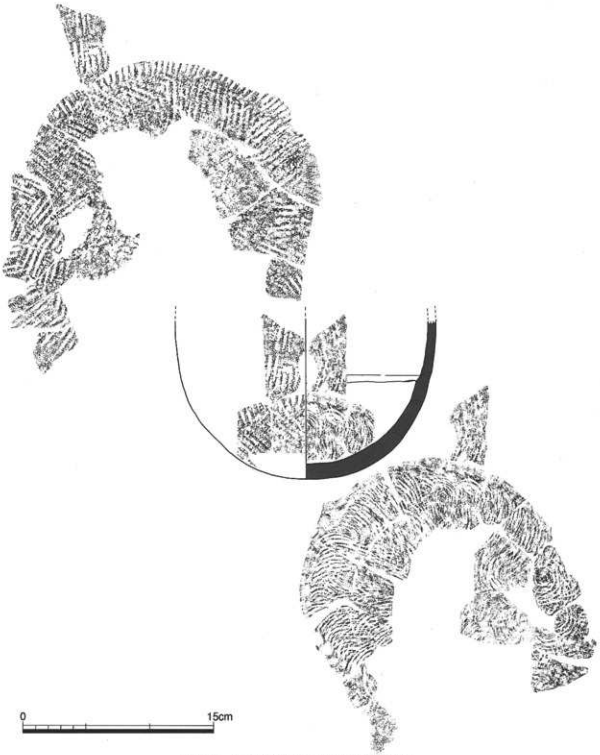
第39図　前方後円墳出土須恵器(甕⑤・1/3)

上：第40図
前方後円墳出土須恵器
(甕⑥・1/3)

下：第41図
前方後円墳出土須恵器
(甕⑦・1/3)







第42図　前方後円墳出土須恵器(甕⑧・1/3)

第37図の甕④は半分以上が残る個体であるが，上半と下半とを接合する破片が出土していないために，図上復元したものである。第39図の甕⑤は横長の胴部を持っており，俵型となる。実測図で右側が胴部を作る際の底部分で，左側が上部となり粘土板をはめ込んだ痕が見られる。第40図の甕⑥は胴部以下の破片接合品である。比較的器壁が厚い。第41図の甕⑦は胴部中位から下半の破片接合資料である。⑥・⑦ともに外面には横方向の刷毛調整が平行叩きの上から施されている。第42図の甕⑧は底部のみの接合資料で，胴部中位の破片は1点のみである。内面の同心円文当て具痕が特徴的で，指なでによる調整痕が明らかに残っており，段階的な叩き締めが行われたことが伺える。

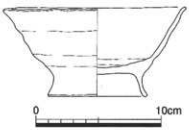
第５章　土坑・掘立柱建物

第１節　土坑墓と集石遺構

(1)　土坑墓（第43～44図　図版４）

前方部南西コーナーから直線距離で約６ｍの地点で検出された。東西方向に主軸を持つ長方形プランの土坑である。主軸はＥ－12°－Ｓ，東西長さ190cm，南北幅70cm，検出面からの深さ20～24cm。覆土は縄文時代遺物包含層（黄褐色土層）よりも黒味が強い暗褐色土層で，しまりがなくやわらかい。分層を試みたができなかった。底面も検出面同様に長方形プランで，やや西側が低くなる。

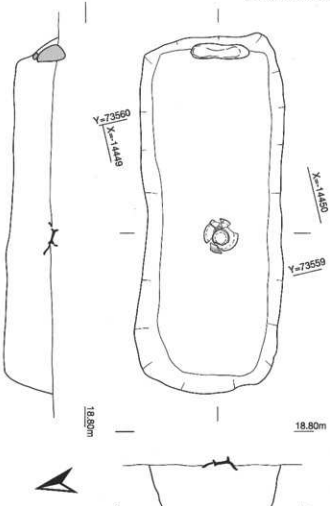
東小口に長さ30cm幅15cm厚さ８cmの板状の礫（角閃石安山岩）が立てられていた。礫の上面は標高18.70mに高さがほぼそろえられており，礫下面は18.52mとなる。その礫の下には小礫（５cm大）があり，礫を支えるように接していた。板状の礫を安定して立てておくための支えの意味が強いと思われる。



第43図　倉地川地区土坑墓出土土器(1/3)

土坑中央よりやや西寄りの位置に土師器椀が伏せた状態で検出された。検出レベルは高台上面が標高18.66m，口縁部が標高18.58mとなる。土坑底からは約20cm上に位置する。一部が欠けるがほぼ完全な形のもので土圧により押しつぶされ割れた状態で検出された。口縁部外面の第44図アミをかけた部分には煤が付着していた。礫と土師器との距離は約85cmである。土師器椀の他には出土品は見られなかった。また底面や壁など詳細に観察したが，木棺などの痕跡は確認できなかった。

構造的には木棺墓が妥当であろうが，釘などの痕跡などが見られない点が気にかかる。埋葬頭位は，礫を立てている東であろうか？古墳の検出状況などからこの付近の検出面は当時の生活面からおよそ10cmほど下がった位置にあろうかと思われる。礫が見え隠れする程度が当時の生活面であろう。礫が目印であったのか，小マウンドがあったのかを検討せねばならないであろう。



第44図　倉地川地区土坑墓 SK01(1/20)

土坑墓出土品（第43図　図版４）

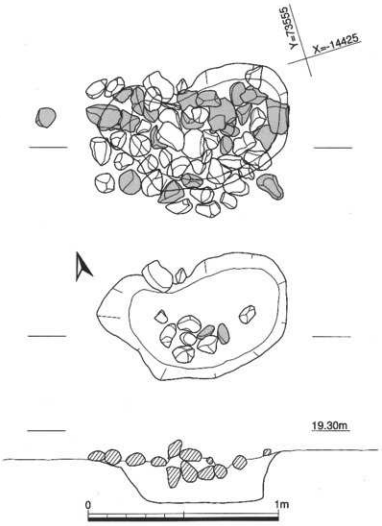
第43図は土坑墓に供献された土師器の実測図である。完全な形に近いが，口縁部が１ヶ所と高台が２ヶ所欠けている。器高約7.1cm，口縁部直径約14.7cm，深さ4.8cm，底部直径9.0cm，高台高さ1.9cm，高台据部直径8.0cmである。底部から口縁部にかけて一気に直線的に立ち上がっており，口唇部で少し外に開

く。底部はほぼ水平で，高台が直線的に立ち，高い印象を受ける。上面観は口縁部，高台ともにほぼ正円形で均整のとれた成形である。内外面ともに横ナデ仕上げで，器壁は体部が3㎜，口縁部は2㎜，底部は6㎜の厚さとなる。高台部分も器壁はほぼ3㎜の厚さにそろえられている。器壁が薄く，外面に残る波状の凹凸から轆轤成形かと考えられる。体部は外面は波打っているが，内面は滑らかな横ナデ仕上げである。口縁部外面にはおよそ8㎝の半円形に煤が付着している。色調は明茶褐色で均一である。胎土は緻密な生地に雲母・赤色砂・白色砂などの小粒子を含んでいる。

(2) 集石遺構（第45図）

第45図は後円部北側約6ｍの位置に検出された集石遺構の実測図である。検出面と下部構造となる土坑を図化している。東西方向約105㎝，南北方向55㎝の長方形の範囲に10㎝大の礫（角閃石安山岩）が並べられていた。そのうち表面が焼かれているものは50％ほどである。第45図のアミをかけた礫は表面に被熱の痕跡が確認できたものである。中央部分は礫が重なっていたが，ほかは礫を取り除くとすぐに土坑覆土となった。礫を取り除くと歪な楕円形プランが現れ，その中心に礫が入り込んでいた。そのためその土坑を集石の下部構造と判断し調査を行った。下部構造は長軸約100㎝，短軸約62㎝で，底面は水平となる。底面の形状は上面のプランに従い楕円形となる。土坑上面に入り込んでいる礫と底面とのレベル差は7㎝以上である。覆土は基盤となる黄褐色土層よりもやや暗めでやわらかいものであった。分層は困難であるが，礫が中心に落ち込んでいることは確認できたので，当初は空洞であったとも考えられる。覆土中からの出土遺物は見られなかった。

この土坑周辺には他にも火を受けたと思われる礫が点在しており，当遺構と類似する遺構が複数存在したのかもしれない。調査期間の都合などによりそれらを確認することは困難であった。（竹中）



第45図　倉地川地区集石遺構 SK02平面・セクション図(1/20)

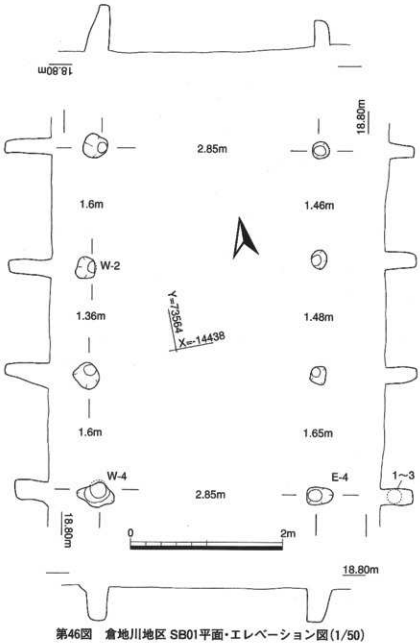
第２節　掘立柱建物

前方後円墳の前方部前面で二棟の掘立柱建物（SB01・SB02）が確認でき，そのうちSB02は周隍の覆土上で検出されており，前方後円墳よりも新しい年代が想定できる。SB03は後円部北側で検出され，これは周隍覆土下からの検出である為，前方後円墳よりも古い年代が想定できる。第５表（Ｐ14）は掘立柱建物の規模・主軸などに関する計測表である。以下に個別に紹介していく。

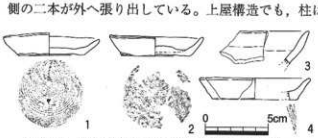
(1) **SB01**（第46・47図）

南北軸の掘立柱建物跡である。桁行き３間（約4.5m），梁行き１間（約2.85m）の規模である。検出面からの柱の深さは60cmほどである。各柱間の芯々間の計測値は実測図に記している。

柱Ｅ－４と柱Ｗ－２との覆土中より土師器皿が出土している。Ｗ－２からは土師器皿の破片が出土している。特にＥ－４からは完全な形のもの（第47図１）とまとまりのある破片とが柱中位から出土している。出土状態は１が伏せた状態で，２はその下に破片となりまとまっていた。破片は接合により，第47図２に示すように80％ほどまで復元できた。建物の廃棄・改築などにより，柱が抜き取られた後に柱穴を埋める際に伏せて入れられたものと思われる。Ｅ－４は建物の南東隅に当たりその対面は鬼門となる北西方向であり，地鎮祭に関わるものであろうか。柱通りであるが，東面および南北面の三面は正確に筋が通っているが，西面は内側の二本が外へ張り出している。上屋構造でも，柱は内側二本が壁から外へ張り出すことになろう。



第46図　倉地川地区 SB01平面・エレベーション図(1/50)



第47図　倉地川地区 SB01柱Ｅ４出土土器(1/3)

柱Ｗ－４はSB02と重複しており，検出プランと掘り方ともに他の柱とは異なっている。柱Ｗ－４の検出面での観察は困難を極めたが，その前後関係はSB01がSB02を切るかたちと考えられる。柱掘り方は直径10～20cmであり，掘り方底面の形状から柱材は10cm程度の丸材と思われる。

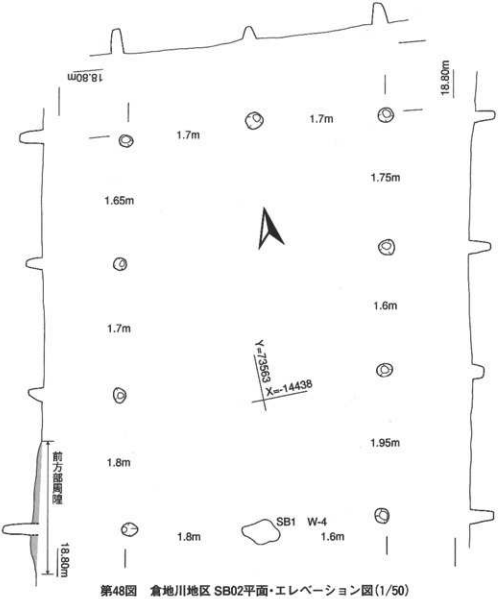
SB01出土遺物（第47図　図版３）

1～**3**は柱Ｅ－４覆土中の出土品で，**1**は完全な形の皿である。口縁部直径約7.7cm，底部直径約5.5cm，高さ1.3～1.8cm。口縁部は波打ち，正円にならない。底面は糸切痕がはっきり残る。外面・内面ともにナデ仕上げで，端部は丸く仕上げられる。底部の接地面は周縁部のみで，中央部分は浮いている。胎土は白色粒子・赤色砂粒を含み，色調は橙色（Hue7.5YR6/4）である。**2**は80％ほど残る皿の破片接合品である。口縁部直径約7.6～7.5cm，底部は5.5～5.6cm，高さ1.6cm。**1**と同じく口縁部は波打っており，底部には糸切り痕がはっきりと残る。また，底部は粘土円板を貼り付けて成形しており，中央部は盛り上がっている。胎土は白色粒子，赤色砂粒が多い。角閃石は小さいものを多く含む。色調はにぶい黄褐色（Hue10YR6/4）である。**3**は**1**や**2**よりも大きい形態で，復元では口縁部直径が12cm程度，高さは3.0cm程となる。ナデ調整により外面中位に段のつく点が特徴的である。胎土は白色粒子・赤色砂粒が多い。色調は橙色（Hue5YR6/8）である。**4**は柱Ｗ－２から出土した皿で，３cm大の破片資料である。復元では口縁部直径が９cm，底部直径6.7cm。底面には糸切り痕が残る。胎土には白色粒子と雲母粒子がみられる。色調は橙色（Hue7.5YR6/6）である。

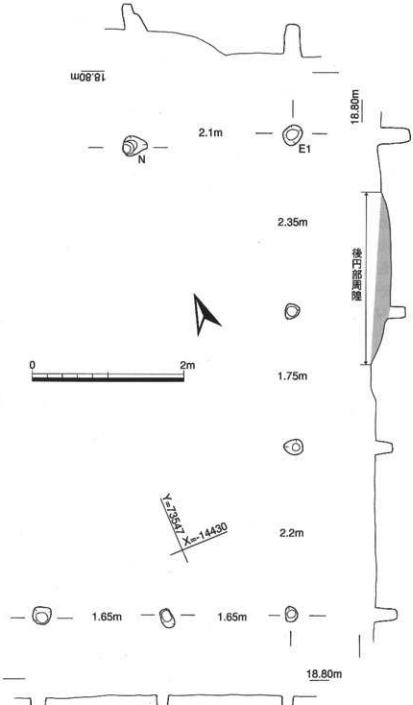
(2)　SB02

（第48図）

SB01と同軸となる３間×２間の掘立柱建物跡である。SB01と同じく，東面は柱通りがよく，西面は中央２本が外側に張り出す構造となる。北面は東西面に対して直角には交わっていない点も特徴的である。西面の柱はすべて前方部周隍が埋没してから掘り込まれている。SB01との前後関係は柱穴からの出土品が見られないため，遺物での検討はできないが，規模はSB02が大きい。柱の直径は掘り方で直径10～15cmとなる。SB01とSB02の建



第48図　倉地川地区 SB02平面・エレベーション図(1/50)



第49図　倉地川地区 SB03平面・エレベーション図(1/50)

物が作られた頃には，前方部の墳丘はある程度低い状態であったであろうが建物を造る場所の選定には，ある程度の制限を与えていると考えられる。

(3)　**SB03**（第49図）

SB03は３間×２間以上の掘立柱建物跡である。前方後円墳の後円部北側の周隍によって切られている。周隍覆土の除去後に検出された柱穴を含んでいるため，古墳の築造よりも古い時期の道構である。東面と南面では柱の筋が通るが，北面では若干内側へ入り込んでいる。南面と北面との柱間が揃っていない。検出面からの深さは25～40㎝で，掘り方は円形で直径が10～15㎝となる。遺物は北面の柱穴Ｎと Ｅ－１から縄文土器片が出土している。早期の土器片が１点，晩期の土器片が２点出土している。

SB03出土品

（第50図　図版３）

1 は縄文時代早期に多くみられる押型文を施された円筒形土器の直立する口縁部片である。口縁部直径は復元で約20㎝以上となる。押型文の一部は指頭によりナデ消されている。押型文は縦６～７㎜，幅４～５㎜の楕円形を単位とし，斜位に連続して回転施文されている。内面は斜位のナデ仕上げである。口縁部は端部で内外面にわたり横ナデ調整が施される。柱Ｎの出土品である。**2** と **3** は縄文時代晩期の土器片である。ともに柱Ｎの出土品である。外面は粗いスサ状の刷毛で調整され，そのあとナデが施されている。内面はナデ仕上げで器面は平滑である。**2** は深鉢形土器の口縁部片と思われ，直径は復元で30㎝程度である。**3** は胴部片と思われ，直径は復元で40㎝程度である。

（竹中）

第50図　倉地川地区 SB03柱Ｎ出土土器(1/3)

第6章　考　　察

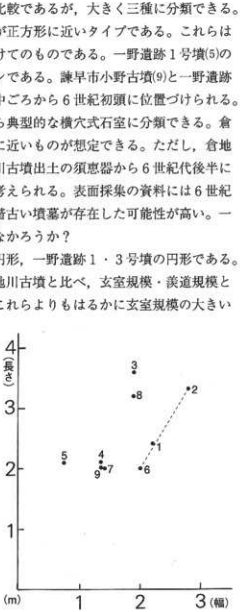
第1節　倉地川古墳の概要（第51図）

今回報告の倉地川古墳は島原半島で2基目の前方後円墳として重要な発見となる。年代的には6世紀後半から7世紀前半代の須恵器が副葬されていたものと思われる。雲仙市国見町では，金山古墳，高下古墳，八反田古墳などが発見されている。このうち金山古墳は調査が行われないまま石室が崩壊していく危機に瀕している。隣接する島原市有明町では，平山古墳と一野遺跡で円墳を主体とする古墳群があり，雲仙市瑞穂町では柿ノ本古墳，雲仙市吾妻町では守山大塚古墳，雲仙市愛野町では一本松古墳が発見されている。発掘調査などが行われ，ある程度内容の明らかなものは八反田古墳（註1），高下古墳（註2），倉地川古墳（註3），一野遺跡（註4・5），平山古墳（註6），柿ノ本古墳（註7），一本松古墳（註8）がある。また，諫早市の小野古墳（註9）も調査が行われている。

本稿では倉地川古墳の位置づけを中心に論を進めていきたい。第51図にこれらの古墳の石室規模を比較してみた。（番号は註に対応する。）玄室の平面プランの比較であるが，大きく三種に分類できる。高下古墳(2)・八反田古墳(1)・平山古墳(6)は玄室の平面プランが正方形に近いタイプである。これらは巨石を用いた構造であり，6世紀代中ごろから7世紀代にかけてのものである。一野遺跡1号墳(5)の石室は狭長なプランで，竪穴系横穴式石室に多用されるプランである。諫早市小野古墳(9)と一野遺跡3号墳(4)も竪穴系横穴式石室に分類できる。これらは5世紀中ごろから6世紀初頭に位置づけられる。一本松古墳(8)・柿ノ本古墳(7)は袖石を立て羨道をもつ構造から典型的な横穴式石室に分類できる。倉地川古墳は平面プランが羽子板状となり一本松古墳に構造的に近いものが想定できる。ただし，倉地川古墳の後道は一本松古墳ほど長いものにはならない。倉地川古墳出土の須恵器から6世紀代後半には築造され，7世紀後半まで追葬などが行われていたものと考えられる。表面採集の資料には6世紀代前半にさかのぼるものもあり，周辺にこの古墳よりも一段階古い墳墓が存在した可能性が高い。一本松古墳にも倉地川古墳と同様な年代を想定してよいのではなかろうか？

古墳の墳形が明らかとなっているのは倉地川古墳の前方後円形，一野遺跡1・3号墳の円形である。玄室規模と墳形がある程度の対応関係を持つのであれば，倉地川古墳と比べ，玄室規模・羨道規模ともに同規模の一本松古墳は前方後円墳となる可能性が高い。これらよりもはるかに玄室規模の大きい小長井町の長戸鬼塚古墳も前方後円形となる可能性があろうか。倉地川古墳よりも玄室規模の小さいものでも，果たして前方後円墳という形態をとらないのであろうか？現在のところ，資料が少ないために断言はできない。そのため今後，古墳の周囲に掘られる周隍の確認調査などが行われることにより古墳にかかわる基本的なデータが明らかになることが望まれる。

現在のところ倉地川古墳は島原半島で最後の前方後円墳である。高下古墳や八反田古墳などのように終末期の様相が深まる前段階の様子を反映しているのが倉地川古墳と考えられる。（竹中）



第51図　埋葬施設（玄室）規模

註　1・2，7～9：長崎県教育委員会1997『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ　3：本報告書記載　4・5：有明町教育委員会2001『一野遺跡Ⅱ』　6：有明町1987『有明町史』上巻

第２節　雲仙市国見町内出土同心円文当て具痕（第52～55図　第15表）

ここでは，国見町で出土している須恵器で公表したものを中心に胴部内面に残る同心円文当て具痕を集成した。須恵器甕に多用される当て具痕である（註１）が，甕以外の資料もあわせて紹介していく。

管見では同心円文当て具痕は第15表にあるように，国見町では４遺跡15個体の資料で観察されている。第15表の間隔は拓影では白い部分の幅で，外径は確認できる範囲の最大径である。甕の内面などに残されたこれらの計測値が，そのまま工具の規模になるとは考えられないことは言うまでもない。あくまでも筆者による痕跡の計測値である。計測した項目ごとに整理すると，以下のようになる。

「中心径」が大きいものは第53図６などのように１cmを超えるものがあり，小さいものは第52図１や第54図12のように４mm前後のものもある。その間の８～９mm前後のものもある。

「間隔」は一つの同心円文でも均一にならない場合もあるが，２～４mmの間に収まる。

第15表　国見町内出土同心円文当て具痕

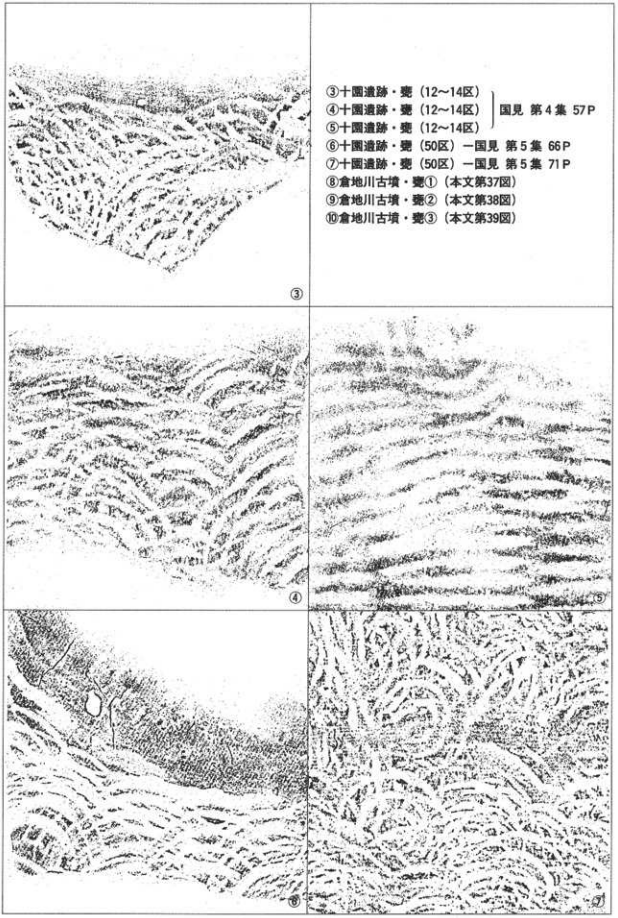
図	番号	器種/部位	出土遺跡	中心径(mm)	間隔(幅：mm)	外径(cm)
52	1	骨鎌器/底内面	矢房遺跡	3.5～4.0	3～4	6.6
	2	長頸壺/胴内面	石原遺跡	16以下	2.5～3	5
53	3	甕/肩内面	十圓遺跡	15以下	2	4.5以上
	4	甕/肩内面		12	2～3	6～7
	5	甕/胴下半内面		20以下	3～3.5	5.6～6
	6	甕/肩内面		22	1.5～2.5	7
	7	甕/胴下半内面		8.5～9	1.5～2	5～
54	8	甕/肩内面	倉地川古墳	14	3	7.4
	9	甕/胴内面		8～9	3～4	7.4
	10	甕/胴内面		8～9	3～4	7～7.5
	11	甕/肩内面		6	3～4	4.5以上
	12	甕/胴内面		4	3～4	5
	13	甕/胴内面		7	2～3	7.5
55	14	甕/胴内面		5～6	2～3	5
	15	14と同一個体		4～5	2～3	5
	16	甕/胴内面		15	2～2.5	4

さて，個別に資料を検討し筆者の気づいた点を紹介していく。まず，**14・15**のように同一個体にもかかわらず，同心円文の形態に差がみられるものが確認できた。中心径はほぼ同一であるが，中心から３つめの圏線の様子などが両者で異なっているため，工具に差があるのでは？と考えられる。

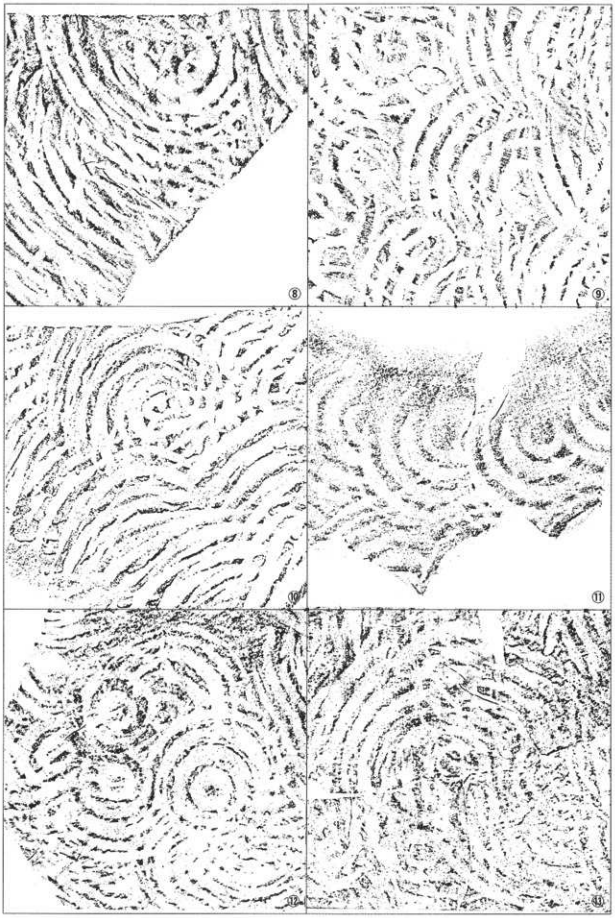
次に，**9・10**はおそらく同一の同心円文工具によるものと考えられる。この二点は胎土や焼成具合

①　矢房遺跡・骨鎌器底部（国見 第３集 52Ｐ）　　②　石原遺跡・長頸壺（国見 第３集 69Ｐ）

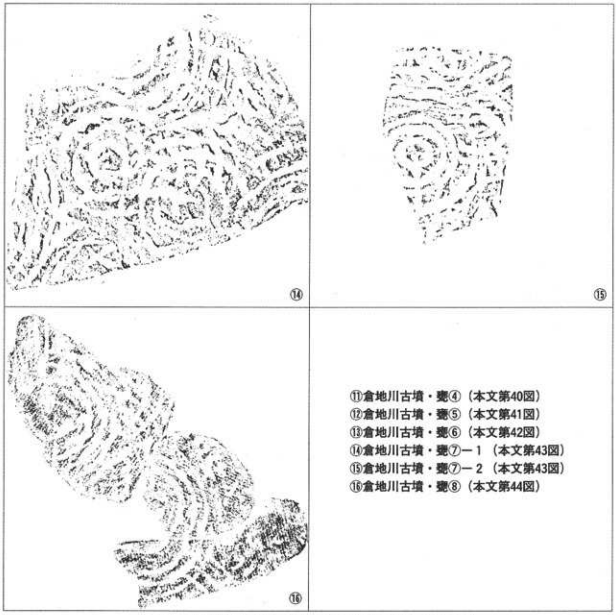
第52図　国見町内出土同心円文当て具痕（石原・矢房遺跡 1/1）



第53図　国見町内出土同心円文当て具痕（十園遺跡 1/1）



第54図　国見町内出土同心円文当て具痕(倉地川地区① 1/1)



第55図　国見町内出土同心円文当て具痕（倉地川地区② 1/1）

などに共通する点が多い。この二点は同じ窯で製作された可能性が高い。

他に特筆すべきは第53図５のように同心円文と平行文が同一個体に施される場合もある。このような例は島原市有明町大野原遺跡（註２）でも確認されている。第53図５は底部近くの破片資料で，底部は全面平行文当て具，それ以上は同心円文であったと思われる。有明町の例は胴部上半が同心円文，下半が平行文となっている。横山氏の指摘（註３）するように叩き締め作業の工程に段階的な工具の使い分けが存在したものかと思われる。

以上，国見町出土の須恵器甕について，特に同心円文当て具痕を集成した。今後，須恵器生産地での状況と比較していくことができれば幸いである。又，胎土分析などの化学的分析成果とも比較検討していくことが望まれる。（竹中）

註

1　叩き締めの研究については，横山浩一2003『古代技術史攷』（岩波書店）を参考している

2　諫見宮士郎1993『概要報告書　大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書第10集　長崎県教育委員会

3　横山浩一2003『古代技術史攷』岩波書店（東京）

第3節　龍王遺跡31区住居跡出土土師器の紹介

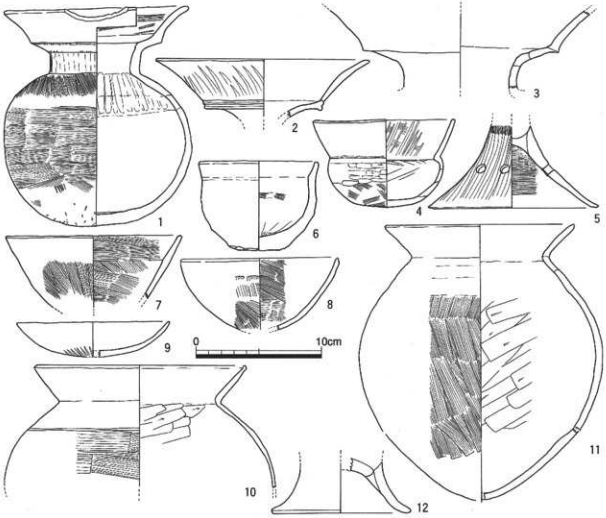
(1)　31区の概略

2004年11月14日に調査地北側の工事範囲内で土器片の集中が発見され，急遽調査を行った地区である。そのため短期間の日数による発掘調査であった。しかし，以下のような重要な遺跡データを得ることができた。ここで簡単に発見された遺構の概略と出土品を紹介しておく。水田畦畔であった部分での発見で遺構が確認できた幅はおよそ90cm長さ2.4mである。竪穴住居跡の壁面と床面とが確認され（写真），覆土から多数の土器片と炭化材が検出されている。

31区発見の住居跡断面

(2)　出土土器（第56図　第16表　図版11）

1は二重口縁壺のほぼ完全な形にまで復元できた個体である。口縁部直径と胴部最大径がほぼ同じで，胴部は球形を呈する。頸部はほぼ直立し，口縁部は緩やかに開いている。全体的に口縁部の強調された形態である。接合の痕跡は胴部中位までは明確であるが，それ以下は判別が難しい。器壁が厚く，口縁部は丁寧なミガキが内外面ともに施されている。胴部は刷毛調整の後，肩部に横ナデが見られる。胴部下半は不定方向の丁寧なナデ調整である。内面は丁寧なナデ調整で，肩部内面は強いナデが縦位に見られる。胴部中位の外面は1～2センチ径の円形に表面のみ剥落した箇所が多く見られる。また底部内面中央も表面が円形に剥落しており，焼成時の剥落であろうか？口縁部には意図的に打ち



第56図　31区 SB01出土土師器(1/3)

欠かれた部分が見られる。**2**・**3**は二重口縁壺の口縁部片で，**3**は**1**よりも大型のものである。**1**とは異なり白っぽい胎土が使われており，表面には化粧土が見られる。全体的に丁寧なナデ調整が施される。**2**は**1**よりもやや大きめの個体に復元される。**5**や**7**・**8**などと同様赤く発色する胎土が使われており，ナデ調整の後に口縁部外面に暗文が見られる。また，口縁部が屈曲し水平となる部分の外面にはヘラ削りが見られる。

4は小型丸底土器（坩型）で，半分ほどまで接合した個体である。口縁部外面は横ナデ調整，胴部は細かいヘラ削り調整と下半がナデ調整となる。内面は口縁部が刷毛調整のあとナデ調整，胴部がナデ調整となる。口縁部と胴部の境は明瞭である。**5**は高坏の脚部片で，透かしが2つずつ3方向から合計6つ穿孔されている。全体的には三角錐状になっており，脚裾もストレートに開いている。器壁は基部から端部になるにつれ徐々に薄くなる。外面は縦位の刷毛調整，内面は横位の刷毛調整である。粘土の接合痕跡も明瞭である。**6**は小型の鉢で，半分ほどが残存する個体である。平底で口縁部に弱い屈曲を作っている。比較的厚手のつくりで，胎土は**1**と似て，混入物が少ない。**7**・**8**は鉢で，**8**は丸底に復元できる。内外面刷毛調整である。**9**は皿であり，これは**1**や**6**と非常に良く似た胎土である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げである。底部のみに刷毛調整の跡が残っている。

10・**11**は布留式甕で，**12**は台付甕の脚部片である。**10**は胴部内面が丁寧に削られており器壁は薄く，外面に沈線が一条見られる。**11**も胴部内面にヘラ削り痕が見られるが比較的厚手で，外面には刷毛調整の後に頸部近くは横ナデ調整が見られる。口縁部形態も**11**は端部が比較的丸くなっている。**10**の胎土には雲母片の混入が目立ち，角閃石が見られない。**11**の胎土には角閃石が多く含まれている。おそらく**11**は**10**を模倣して製作したものであろう。底部形態は破片資料による復元であるので実測図ほどに尖底となるかは不明である。

(3) 出土土器の位置づけ

出土した土器は大村市黄金山古墳出土の土師器に類似する点が多く，布留式（新段階）に並行する時期のものと考えられ，年代的には4世紀中ごろから後半と考えておきたい。島原半島ではこの時期の良好な一括土器群に恵まれていないので，31区出土土器群は重要な資料となる。島原半島検出の住居跡の中では稗田原遺跡住居跡出土の一群の前段階に位置づけられる一群である。（竹中）

参考文献　竹中哲朗2001「一野古墳群出土土器の編年」西海考古第4号　西海考古同人会（長崎）

第16表　31区 SB01出土土器観察表

図	番号	種別	法量（cm）	技法的特徴		胎土／色調	備考
56	1	土師器 壺	口縁部直径　14.2 高さ　17	外面	上半：縦刷毛，胴部：横刷毛 下半：不定方向の刷毛＋ナデ	角閃石（細かいもの）・雲母粒子多い， 白色粒子 橙（Hue5YR6/6）～にぶい黄橙（Hue10YR7/2）	口縁部が意図的に打ち欠かれている。黒斑
				内面	丁寧なナデ，滑らかな仕上がり		
	2	土師器 壺	口縁部直径　17 残存高　4.5	外面	上半：ナデ，下半：ヘラ削り	雲母・角閃石に多い，石英，白色粒子 赤橙（Hue10YR6/6）	外面：暗文あり
				内面	ナデ		
	3	土師器 壺	口縁部　20.5以上 残存高　6	外面	横ナデ仕上げ	角閃石多い，雲母，石英 浅黄橙（Hue10YR8/3）	
				内面	横ナデ仕上げ		
	4	土師器 小型 丸底土器	口縁部直径　11.3 残存高　6.8	外面	上半：横ナデ，胴部：ヘラ削り 下半：刷毛	角閃石，雲母粒子，白色粒子 浅黄橙（Hue7.5YR8/3）～橙（Hue7.5YR6/6）	黒斑あり
				内面	横刷毛後ナデ		
	5	土師器 高坏（脚部）	底径　13.4 残存高　6.5	外面	刷毛	雲母・角閃石多い，石英，白色粒子 赤橙（Hue10YR6/6）	
				内面	刷毛		
	6	土師器 鉢	口縁部直径　9.5 器高　7	外面	ナデ	雲母・白色粒子多い 灰黄（Hue2.5YR6/2）～黄灰（Hue2.5YR6/1）	外面：部分的に煤付着
				内面	ナデ		
	7	土師器 鉢	口縁部直径　14 残存高　5.7	外面	刷毛	雲母粒子・石英・白色粒子多い 橙（Hue5YR7/6）	
				内面	刷毛		
	8	土師器 鉢	口縁部直径　12.5 残存高　5.7	外面	刷毛	雲母粒子・白色粒子・角閃石多い にぶい橙（Hue7.5YR6/4）	
				内面	刷毛		
	9	土師器 浅鉢（皿）	口縁部直径　12 残存高　2.8	外面	丁寧なナデ仕上げ	雲母粒子，角閃石，石英，白色粒子 外面：褐灰（Hue10YR5/1） 内面：にぶい黄橙（Hue10YR7/2）	
				内面	丁寧なナデ仕上げ		
	10	土師器 甕	口縁部直径　16.9 残存高　9.5	外面	刷毛	雲母粒子，石英多い 淡黄（Hue2.5YR8/3）	内外面 口縁部：ナデ
				内面	ヘラ削り		
	11	土師器 甕	口縁部直径　15 残存高　22	外面	刷毛	白色粒子，角閃石，雲母粒子多い にぶい黄橙（Hue10YR7/4）	内外面 口縁部：横ナデ
				内面	ヘラ削り		
	12	土師器 甕（脚部）	底径　11 残存高　4.3	外面	横ナデ	角閃石・雲母粒子・白色粒子多い 明褐（Hue10YR7/6）	
				内面	横ナデ		

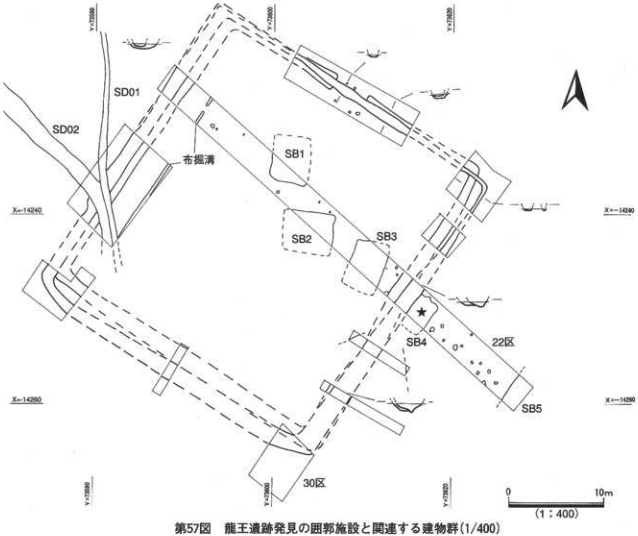
第４節　龍王遺跡発見の古墳時代前期豪族居館（巻頭図版④）

龍王遺跡では調査範囲の北側で行われていた圃場部分の工事中にいわゆる豪族居館が発見されている。トレンチ調査による部分的な検出作業を行った。遺構の大部分は完成した圃場下に保存されているため，ここでは検出面での状況を中心に報告しておく。

いわゆる豪族居館は，旧圃場の表土下60～70cmで検出に至っている。検出された方形囲郭施設は，二つが重なった状態であった。新しいもの（以下２号囲郭施設と呼ぶ）で真北から東へ約35度傾いており，約34m四方の大きさとなる。部分的に行ったトレンチ調査では，古いもの（１号）は断面逆台形，２号囲郭施設は逆台形となる部分もあるが，基本的にはＶ字になるものと思われる。１号と２号との時間的な差は，断片的な観察ではあるが，埋没状況はどちらも一気に埋められた感が強い。特に２号囲郭施設ではたくさんの土器がほぼ完全な形のままで検出された部分（第57図30区，巻頭図版④）が確認できた。30区の土器はトレンチの範囲で確認できた土器は全て取上げ，パンコンテナ20箱を数えた。埋没土よりも土器が多い印象を受けた。平面形態の特徴は，１号囲郭施設には出入り口と思われる土橋が北辺中央に確認できた。出入り口の検出面での幅は約４m，門に関わる柱などの施設は明瞭には確認できなかったが，ピットは幾つか発見されており，何らかの施設があったものと思われる。

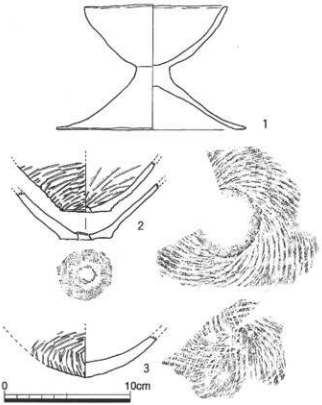
この方形囲郭施設は古代の溝（SD01）と断面Ｖ字となる濠（SD02）とに切られていた。SD02は第57図の外側までのびており，年代的には古墳時代前期に埋まったと考えている。２号囲郭施設の30区で大量に出土した土器は未洗浄ではあるが，古墳時代前期前半の段階のものと今のところ考えられる。

囲郭施設内部では，囲郭施設に関係するものとして布掘溝が西辺で検出できた。西辺の濠に平行し



第57図　龍王遺跡発見の囲郭施設と関連する建物群(1/400)

て濠の中心から約４ｍの位置に検出されている。そのほかに囲郭施設と主軸を違えた方形竪穴住居跡が３棟，囲郭施設と主軸を同じくする方形竪穴住居跡が２棟検出されている。後者の２棟のうち，１棟（SB４）は濠に切られており，もう１棟（SB５・次節で出土土器を紹介）は火災に遭ったような状態での検出であった。SB１～３のトレンチ調査では土器片の検出がなく，丁寧に掃除などが行われた後に埋められたものと思われた。これらの竪穴住居跡の内，方形囲郭施設と同時期にあった可能性が高いものはSB５で，SB１～３はSD02と同時期，SB４は最も古いものかと考えている。したがって方形囲郭施設の北半分には同時期の建物は建てられなかったのではないかと思われる。



第58図　囲郭施設内部 SB４出土土師器(1/3)

第58図はSB４付近で出土した古墳時代初頭の土器群である。重機による掘り下げで窪んでいた部分で発見したもので，SB４の覆土中に含まれていたものと思われる。**1**は土師器高坏で７割程度までの残存率である。坏部と脚部の高さの比率がほぼ同じで，坏部は丸く，脚部は裾がなだらかに広がっている。胎土には角閃石と雲母片が多く含まれている。**2**と**3**は土師器甕の底部片でいずれも左下がりの叩き目が外面に見られる特徴的な資料である。**2**は底部が平底となり，焼成前の穿孔が行われている。平底外面には木葉痕が残る。内面には叩き目に対応するように刷毛先の痕跡が複数連続して確認できる。**3**は尖底となり，**2**と同じ方向の叩き目が確認できる。内面は丁寧にナデ消されている。**2**・**3**ともに角閃石・雲母・石英を含んでいる。（竹中）

調査終了後の古墳の上で

第５節　龍王遺跡22区住居跡出土土師器の紹介

龍王遺跡第22区　SB５住居跡出土土器（第59図　第17表）

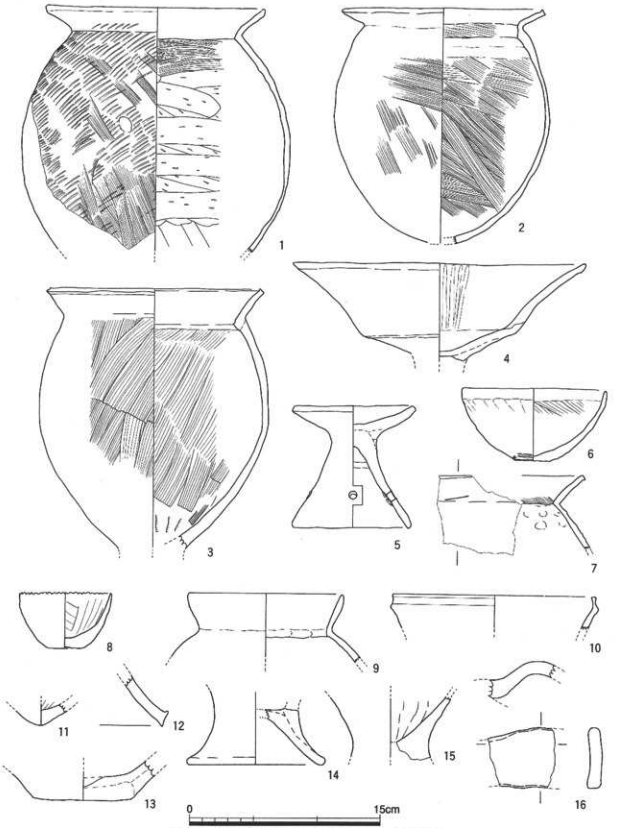
第59図に掲載した土器は，龍王遺跡22区東端で検出したSB５住居跡の出土品である。当住居跡は床面直上に土器類や炭化物類が残された状態で検出された。その状態は火災にあったまま埋没したものと思われる。第59図１から７は床面直上からの出土土器で，８以下は覆土中からの出土土器である。但し，８についてはほぼ完全な形を保っており，床面直上での出土品としておきたい。１から６の特徴は半分もしくは完全な形にまで復元できるものが多い。９以下は破片資料で比較的剥れ口が摩滅しているものが多い。以下に土器の特徴を紹介し，口縁部直径などは第17表に整理している。鳥原半島の土器には胎土に角閃石を含むことが多いが，１および５・８は含まず，他地域からの搬入品か？

１から３は煮炊きに利用された甕で，３に脚が付くほかは丸底もしくは尖底となろう。１は外面に叩き痕跡，内面にヘラ削り痕跡が見られる古式土師器である。口縁端部を上に摘み上げており，その開き具合などは庄内式並行段階の特徴をもっている。２は頸部内面に特徴的な段を持った甕で，１と同様に端部を摘み上げる口縁部形態となる。調整は内外面刷毛調整で，１とは対照的である。３は脚部が失われているが台付甕である。口縁部と胴部との接合が特徴的で，内面に高い段がみられる。その段から下に斜方向の刷毛調整がみられる。４は高坏坏部片で全周するが，脚部は失われている。脚部は中実になるものと思われる。口縁部の開きに特徴があり，端部の仕上げも特徴的である。内面上半はミガキ調整で暗文状に仕上げている。５は器台でほぼ完全な形を保ち，脚部には４つの丸い孔がほぼ等間隔で穿たれている。坏部が浅く，脚部が高い形態である。６は小型の鉢で平底となる。底部外面は叩き調整痕がみられる。７は甕の口縁部片で，胴部外面に横方向主体の叩き調整痕がみられ，内部は丁寧なナデ調整である。１とほぼ同様な胎土と焼き上がりである。８はほぼ完全な形にまで残存している小型の鉢で，６より一回り小さい。平底で中心が上がっており，口縁上部には刻みがみられる。

９以下は覆土出土品で特徴的なものを示した。９は小型の甕の口縁部片で，内外面に細かい刷毛調整である。10は壺の口縁部片で，口縁部が段をつくって直立している。11は小型鉢の底部片で尖底となる。内外面ともにナデ仕上げで，内部は刷毛工具で押さえた痕が残る。12は筒型器台の裾部片で外面に刷毛調整がみられ，端部は横ナデ仕上げ。13は大型の壺もしくは甕の底部片で，レンズとなる。14・15は台付甕の底部片でいずれも火を受けて脆くなっている。16は把手状土器片である。

当住居跡は火災に遭った痕跡がみられ床面直上の出土となるため，良好な一括資料と判断してよい土器群である。今後，当地方の古式土師器の基準資料として重要な位置を占めてくるものと思われる。

写真①　龍王遺跡22区 SB-５住居跡遺物検出状況



第59図　龍王遺跡22区 SB 5 住居跡出土土器(1/3)

第17表　龍王遺跡22区 SB５出土土器観察表

図	番号	種別	法量(cm)　(復元径)	技術的特徴		胎土／色調	備考
59	1	土師器 甕 (庄内系)	口縁部直径　17.5 残存高　19 頸部径　13.3 頸部高　2.2	外面	叩き調整後，ナデ及び刷毛調整	砂礫多く含むが，角閃石は含まない，石英，雲母 白っぽい淡黄(Hue2.5YR8/2～8/3) 黒斑部：内部が黒っぽい	口縁部：低く，端部が上を向く。 全体：叩き調整 胴部最大径は中位で21cm。
				内面	刷毛調整後，横方向斜位の削り		
	2	土師器 甕	口縁部直径　16 (復元径) 残存高　18.6	外面	刷毛調整	角閃石，雲母・白・赤色粒子 にぶい黄橙(Hue10YR7/2)～橙(Hue7.5YR6/6)	外面：中位以下に煤付着。 底部付近：被熱による赤化。 胴部最大径は中位で17cm。
				内面	下から上へ斜位刷毛 底部：指頭圧痕が残る		
	3	土師器 台付甕	口縁部直径　17 (復元径) 残存高　20.4	外面	斜位の細い刷毛調整 下半：ナデ仕上げ	角閃石，白色粒子 灰色(Hue10YR8/2)～褐灰(Hue10YR5/1)	頸部内面の稜がはっきりしている。 口縁端部は上部へつまみ上げている。 胴部最大径は中位で18cm。
				内面	刷毛調整		
	4	土師器 高坏	口縁部直径　22.5～23 残存高　7.7 脚接合部直径　4.5	外面	横ナデ	角閃石，雲母，長英，石英， 灰褐色(Hue7.5YR6/2) にぶい褐色(Hue7.5YR6/3)	外面中位：強成時表面円形剥離痕。 内面：表面に剥離痕。 黒斑あり。
				内面	上半：放射状に長いミガキ 下半：ミガキ，丸く回転		
	5	土師器 器台	器台直径　9.4 裾部直径　9.4 残存高　9.6	外面	ナデ仕上げ	白っぽい長石・石英，赤色砂少々 浅黄色(Hue2.5Y8/4)	脚部穿孔は，均等に４つ。
				内面	ナデ仕上げ		
	6	土師器 浅鉢	口縁部直径　11.5～10.5 底径　2.7 残存高　5.7	外面	叩き	赤色砂，角閃石粒，石英，長石 にぶい黄橙(Hue10YR6/3)～黒斑	底部に叩きあり。 平底。
				内面	ナデ		
	7	土師器 甕 (庄内系)	残存高　5.7	外面	横方向の叩き	ちみつ，雲母粒子， 石英・白色粒子	灰色(Hue7.5YR8/1)～橙(Hue5YR6/8)
				内面	ナデ，指頭オサエ痕		
	8	土師器 小鉢	口縁部直径　7.2 残存高　4.5	外面	ナデ	角閃石，石英，長石 にぶい黄橙(Hue10YR7/4)	平底。
				内面	刷毛		
	9	土師器 甕	口縁部直径　12.2 (復元径) 残存高　5.3	外面	口縁部：横ナデ 細かい刷毛	角閃石，長石，石英，赤色砂多い 口縁部：にぶい黄橙(Hue10YR6/3)～黒斑 胴部：暗褐色(Hue10YR3/4)	口縁部：黒斑２cm大
				内面	口縁部：横ナデ 細かい刷毛		
	10	土師器 壺	口縁部直径　16 残存高　2.5	外面	摩滅が激しい	角閃石，石英，長石 明赤褐色(Hue2.5YR5/8)	赤く発色する生地を化粧土に使用。
				内面	摩滅が激しい		
	11	土師器 小鉢	残存高　1.7	外面	ナデ	角閃石，雲母片 外面：橙色(Hue7.5YR6/6)	内面：灰白(Hue2.5Y7/1)
				内面	刷毛工具でオサエ後ナデ		
	12	土師器 筒型器台 脚部片	残存高　3.9	外面	横ナデ	角閃石，石英，長石 にぶい黄橙(Hue10YR7/3～7/4) 端部：橙色(Hue7.5YR6/6)	黒斑あり。
				内面	横ナデ		
	13	土師器 壺	底径　8 残存高　3.1	外面	ナデ　赤色顔料	雲母粒子，角閃石，石英，長石 にぶい橙(Hue7.5YR7/3～7/4)	底部：レンズ状
				内面	ナデ		
	14	土師器 甕	底径　10.8 残存高　5.7	外面	ナデ	角閃石，赤・白色粒子 にぶい橙(Hue7.5YR6/4)	(脚台部)
				内面	ナデ		
	15	土師器 甕	残存高　5	外面	縦方向ナデ	角閃石，石英，白色粒子 明茶褐色(Hue10YR7/6)	(脚台部片)
				内面	刷毛状工具で削り		
	16	土師器 把手	残存高　4.8	外面	ナデ	内面：灰白(Hue10YR8/2) 外面：灰黄褐 (Hue10YR6/2-5/2-4/2)	角閃石，白色粒子
				内面	ナデ		

写真②　龍王遺跡22区 SB５住居址遺物検出状況